

## ●第80回日本生理学会大会を終えて.

当番幹事：福岡大学医学部生理学  
今永 一成，河田 溥

福岡での大会は第50回大会（九州大学，問田，後藤，栗山，桑原当番幹事）でありましたので30年振りになります。今大会は，第26回日本医学会総会の福岡市開催を機に，その分科会の一つとして開催させて頂きました。そして，同じく分科会として第76回日本薬理学会年会も福岡開催（九州大学薬理，伊東祐之教授会長）ということで，両学会を「同時，同会場開催」と致しました。これは，最近の生理分野と薬理分野の研究が互いに極めて近くなっており補完の関係にあることから，両学会会員の情報交換を盛んにし，両学会の活性化を促す上で絶好の機会であると云う九州地区常任幹事を含む多くの会員，薬理関係者の強い意見があったためであります。過去では千葉大会（第41回大会）のおり，会場は別々で2つの合同シンポジウムが企画されたことがありました。今回のように，全くのドッキングは両学会にとって最初の試みでありました。学会のやり方，会員数，財政（薬理学会は社団法人）の面で両学会に差異がございますし，両学会夫々のポリシーがあり，相互に大変気を配り合いました。プログラムの編成にあたっては，両学会の特質を尊重すること，同時開催の利点を最大に引き出せることを心掛けました。

両学会の参加者を約4500名，演題数約1800題と予測し，従来の大学施設では賅うことが出来ないこと，会場へのアクセスが良好であるべきことなどから，市中の一般施設を使用することになりました。幸いにも，会議開催に対しては完璧に近い設備をもつ福岡国際会議場が丁度竣工し，最初の使用となりました。これを中心に近傍の2施設を使用出来，大方の演題を消化可能な会場に恵まれました。しかし，会場費，設備費，人件費などのことで薬理学会と歩調を合わせ参加費値上げの

やむなきに至りました。また，シンポジウムも両学会員の混成を奨励致しましたために登録方法の煩雑さ，生理と薬理での研究分野の分類の差異など，会員の皆様には多々ご不便をお掛け致しましたことをお詫び致しますとともに，会員の皆様の多大なご協力に心から感謝致します。

お陰さまで，各会場では，生理側，薬理側から，今までにない活発な討論が交わされ，会員にも好評で高く評価され，所期の目的は達成されたものと，主催者側一同安堵と興奮と歓喜で一杯であります。

今大会を振り返り，いくつかの問題点，反省点を含め経過をご報告致します。

### 1) 参加者数

生理関係（招待者，事前登録，当日参加者を含む）：1740名

学生参加者：大学院学生395名，学部学生48名

（参考：全参加者数：4292名，薬理関係：2552名）

### 2) 今大会に導入した新しい企画と試み

- ①生理学会大会と薬理学会年会を共同で開催したこと。
- ②プログラム委員に生理学会委員会（シンポジウム企画を希望する委員会）の代表をメンバーに迎えたこと。
- ③生理学会委員会企画シンポジウムを設けたこと。
- ④生理薬理共同企画シンポジウムを設けたこと。
- ⑤生理公募シンポジウムにもシンポジストに薬理関係者も加えることを奨励。
- ⑥演題登録では全てUMINによるオンラインシ

- システムを利用したこと（昨年の広島大会に続いてUMIN登録に致しましたが、薬理関係者にも同じくUMIN登録をお願い致しました）。
- ⑦和文予稿集を廃止し全て英語（abstractに近い内容）にしたこと。
- ⑧プログラム冊子と英文予稿抄録を別にし、英文予稿抄録をCD-ROMに収録したこと。（薬理関係のabstractは学会前に刊行されるJournal of Pharmacological Science, Supplement (Vol. 91, Suppl I, 2003)にも掲載されているが、薬理関係のabstractも同じCD-ROMに収録）
- ⑨プログラム冊子では、演題、著者、所属を和文英文並記にしたこと。
- ⑩プログラム冊子にはシンポジウムのconceptのみを掲載したこと。
- ⑪口頭発表を全てPCにしたこと（OHPも可能）。
- ⑫口頭発表の図は英文にしたこと。
- ⑬ポスターでは、演題、著者、所属、目的、結論を和文、英文並記にし、図説明は英文にしたこと。
- ⑭生理学会会員が関与する全てのabstractをJapanese Journal of Physiology, Vol. 53, Supplement, 2003に掲載すること。

### 3) シンポジウム、特別講演、一般演題及びランチョンセミナーの数

( )内の数字は発表演題数

- 教育委員会シンポジウム：1題 (6)  
 研究倫理委員会シンポジウム：1題 (3)  
 学術研究委員会シンポジウム：3題 (14)  
 生理研連シンポジウム：1題 (4)  
 IUPS Symposium：4題 (20)  
 Journal Physiology Symposium：1題 (7)  
 Japan-Korea Symposium：1題 (6)  
 若手の会シンポジウム：1題 (3)  
 以上生理独自企画シンポジウム：合計13題

(63)

- 生理薬理共同企画シンポジウム：15題 (81)  
 特別講演：3題

- 生理公募シンポジウム：21題 (100)  
 一般演題 口頭発表：154題  
                   ポスター発表：590題  
 ランチョンセミナー：4題 (6)  
 その他  
 サテライト企画：4 (公開市民講座「病気の起こり方—分かりやすい話し」)  
                   (第3回環境生理シンポジウム)  
                   (日本生理学会若手の会「学术交流合宿」)  
                   (生理学女性研究者の会 (WPJ))  
 Meet the Lecturer (会期中大会会場で)  
 \*参考のため薬理関係の数。  
 参加者数：2552名  
 薬理独自企画シンポジウム：3題 (11)  
 特別講演：5題  
 教育講演：5題  
 公募シンポジウム：25題 (129)  
 一般演題  
 口頭発表：175題  
 ポスター発表：717題  
 ランチョンセミナー：7題 (8)  
 サテライト企画：1

### 4) プログラム委員会構成

九州地区常任幹事（新、旧）、当番校以外に福岡県4大学、即ち産業医科大学、九州大学、久留米大学、福岡歯科大学の生理学関係講座から代表1名（以上九州地区委員会）、生理学会から前年度当番校、次年度当番校、IUPSプログラム委員会、学術研究委員会、生理研連、教育委員会、研究倫理委員会から代表1名をもってプログラム委員会委員と致しました。九州地区委員会と薬理プログラム委員会とは度々協議を重ねてきました。生理関係の拡大委員会（全委員出席）は薬理プログラム委員会代表3名出席のもと1回開催致しました。

### 5) 特別講演、シンポジウム

- ①特別講演者の選定にあたっては、全プログラ

ム委員の先生方に候補を推薦して頂き推薦の多い先生を考えました。その一人としてDavid Julius教授（UCSF）を予定致しておりましたが、先約ありとのことで実現しませんでした。しかし、3名の日本の先生方には、夫々、ご研究の成果、研究のトピック、研究の方法論、哲学を講演され深い感銘を受けました。特に、若い会員が多く参集して頂きましたことは有意義であったと思われました。海外からの特別講演者には、薬理が力を入れて下さり感謝致しております。ノーベル賞学者のPaul Greengard教授（2000年度受賞）の講演にはさすがに満員の盛況でした。

②2009年のIUPS日本開催が決定されておりますため、学会の国際化を目指し、広島大会に続き、IUPS Symposiumを4題企画して頂きました。また、J Physiology Symposium, 次回FAOPS開催（2006）が韓国でありますためJapan-Korea Symposiumをも企画して頂きました（IUPSプログラム委員会企画）。当然ながら全て英語発表であります。昨年に比べ聴衆者も多く活発な討論が行われましたことは、大変有意義でありました。韓国からはFAOPS会長のK.W. Kim教授, Y.E. Earm教授をはじめ十数人の若い研究者の参加もみられました。

③従来から企画されておりました教育委員会からの教育シンポジウム、研究倫理委員会からの実験動物シンポジウム、それに昨年に続く生理研連、若手の会からのシンポジウムを企画して頂きました。さらに、今大会から、生理学会の研究方向指針ともいべきシンポジウムとして学術研究委員会から3題企画して頂きました。学際的シンポジウムであり好評でありました。今後も続けられるべきものと思います。

④生理薬理共同企画シンポジウムを15題企画しました。両学会大会を福岡で開催しますことから地区の特徴を出すべきであろうと云う趣旨から、生理関係からは主に九州地区プログラム委員会のメンバーが参画し、薬理関係プログラム委員会と共に「QOLをメインテーマ」として課題を

選定しました。座長も生理関係、薬理関係から成る2座長制とし、シンポジストも生理薬理混成にし、学際的シンポジウムになるように企画されました。

⑤公募シンポジウムでは、薬理関係のシンポジストを加えることを奨励致しました。応募が多い時には会場の関係から選考の必要があるかと懸念致しておりましたが、許容範囲内の応募数でありましたので全て採用致しました。薬理関係公募シンポジウムもほぼ同じ程度に収まりました。薬理関係のシンポジウムにも生理関係シンポジストを加えて頂くようにして頂き、生理関係の50名が薬理関係シンポジウムにシンポジストとして発表致しました。

## 6) 抄録

①従来の和文予稿集を廃止し、予稿ですが全て英文で完成に近いabstractにして頂きました。これは予稿集廃止の前段階的の意味をもっております。以前（第77回）予稿集廃止が提案されましたが、時機尚早とのことで保留になっておりましたことはご承知のことと思います。しかし、年々演題数が増加し予稿集でも相当の厚さになること、予稿集の内容が完成された要旨に近いこと、abstract掲載のJapanese Journal Physiology Supplementが学会後かなり経過して発刊されること（priorityの問題）、予稿集発行の経費などから、時代にそぐわない、他の学会では予稿集なるものを出していない、などから廃止の意見が強くなってきました。今回共同で開催した薬理学会でも年会時に既にSupplementが発刊配布されております。学術研究委員会からも提案され、常任幹事会にも計られ、第81回札幌大会からは予稿集廃止、abstract掲載Japanese Journal Physiology Supplementが大会前に発刊となります。

②抄録をCD-ROMに致しましたが、これは薬理との共同のため、抄録集印刷では相当の分厚さになること、携帯に不便であること、印刷代、送料の経済的理由からでした。必要なものは前もっ

て各自プリントアウトして頂くようお願いし、索引方法には利用者に便利のように、プログラムから、日程表から、著者から、共著者から、Key Wordから、演題名から索引可能と致しました。会場での急な要望もありますことから会場にプリンターを数台準備致しました。利用状況は聞いておりませんが、多くて混み合い、混雑したと云うことは無かったようです。パソコン操作に慣れた若者には何でもなかったでしょうが、パソコン操作に慣れない年長組にはご不便ではなかったのではと懸念致しております。

③ abstract掲載は従来どおり Japanese Journal of Physiology, Supplement (Vol. 53, Suppl, 2003)へ掲載になります。生理企画シンポジウム、生理公募シンポジウム、共同企画シンポジウムは勿論であります。薬理公募シンポジウムにも生理学会会員の発表が含まれておりますので、薬理公募シンポジウムのabstractも上記 Japanese Journal of Physiology, Supplementに掲載されます。尚、共同企画シンポジウム、薬理公募シンポジウムのabstractは Journal of Pharmacological Science, Supplement (Vol. 91, Suppl I, 2003)に既に掲載されておりますので、重複発表回避のため出版社から転載許可を得ております。

## 7) 発表方法

①口頭発表は最近の動向を取り入れ、PC使用(液晶プロジェクター)と致しました。従来のスライド愛好者の方々にはご不便かと思いましたが、ご協力に感謝致します。トラブルを心配し総て業者の責任において管理運営致しましたが、不都合は1件のみの報告がありました。

②一般演題では口頭発表とポスター発表の2本立てに致しました。どちらにするかは従来どおり基本的には自己選択に致しました。口頭発表をかなり導入致したのは若い人に口頭発表の機会を出来るだけ与えようとする発想からでした。演題数は会場数の関係、薬理との比例を考慮して150題程度になりました。発表時間は演題数から

考え、時間的制約があり12分になりました。

③ポスター発表では、パネル及び会場は、十分なスペースを確保致しましたのでご満足頂けたものと思っております。発表方法として、ポスターを貼るだけでなく、ジャンル別に座長を設け、発表討論をして頂くように考えておりましたが、これも時間的制約のため実現不可能となり反省と心残り致しております。一般演題をポスター発表のみにする傾向にあります。ポスター発表を尊重するような方策を十分考えることも必要かと思っております。

## 8) プログラム編成

従来から、生理学会大会、薬理学会年会は夫々会期は3日間で開催されておりますが、今回は共同開催にも拘わらず会期を3日間で致しました。演題数も単独開催とほぼ同じでありましたため、プログラムはかなり窮屈になりました。演題の消化には会場の増加が必要になりましたが、出来るだけ類似テーマの時間的重なりを避けるように編成に相当気を遣いました。いろいろご意見を頂きましたが、しかし、3日間という短期間のなかで完全を期することは不可能でありご理解頂きますようお願い致します。

## 9) 参加費

参加費に関していろいろご意見を頂きました。生理学会では従来、「平等の精神」を尊重すると云うポリシーのもと、基本的には参加者全員(特別講演など特別な招待者は例外)参加費を支払うことで大会が運営されてきたように思います。シンポジウムでの招待者は参加費を免除にするとかどうかは当番幹事に一任されておりました。従って、従来大会では、シンポジストが非会員の場合、その参加費はシンポジウムのオーガナイザーの責任において支払うことも多々ありました。今大会は薬理学会との共同であり、シンポジウムへの非会員招待者には参加費免除になっております。薬理学会とそうでない生理学会の間で意見の相違

があり、おしかりを受けることもしばしばでありました。今大会では、IUPS, J Physiology, Japan-Korea Symposium, 共同企画シンポジウムでの講演者で非会員に対しては参加費を免除致しました。他のシンポジウムにおける非会員に關しましては支払うと云う線でオーガナイザーに一任致しました。この件に關して常任幹事会、総会に提案させて頂き、次回からはシンポジウムを含め招待講演者で非会員には参加費免除と云うことが学会の方針となりました（常任幹事会、総会議事参照）。今後当番幹事は資金の面で大変でしょうが、生理学会大会にも広い分野の先生方を多く招聘することで活性化を促すと云う意義のもと、よろしくお願い致します。尚、一般演題では「発表筆頭者は生理学会会員に限る」ことに異論はないと思います。

#### 10) その他

①講演に招待された著名な外国の先生方を囲んで自由な討論をする会を、若い方達を対象として第一日目の講演会終了後に、Meet the Lecturerとして会場内に設けました。HPなどで広告募集致しておりましたが、急なこともあり参加者が十数名程度であり少々残念でありました。これも時間的制約のためかもしれません。今後も十分な時間の余裕をもってこのような企画をお願いしたいと思います。

②評議員会、総会への出席者が例年になく極めて少なかったようです。今大会では、プログラム編成の都合から、また薬理学会に合わせて、評議委員会、総会を第一日目の講演終了後に致しました。プログラムへの掲載場所の不備、掲示アナウンスの不徹底などが原因と考えられます。心から

お詫び致します。

③昨年に続き、託児所を大会会場内に設置致しました。このことはHPにも掲載し前もって募集致しました。薬理関係にもHPで公示して頂き利用者を募集致しました。経費に關しては、施設利用費は当番幹事で世話をし、経費として50,000円を生理学会から援助頂きました。薬理学会からも同額援助（会長から）を頂きました。（利用者数：6家族、3日間延べ35名）

#### 11) 最後に

今大会において生理学会関連で発表された演題数は（共同企画シンポジウムを含む）998題で、薬理公募シンポジウムの中の生理学関係（50題）を含めると生理関係全発表演題数は実に1048題になりました。3日間と云う短期間でありましたが、日頃の研究成果の発表とともに、生理分野の方とは勿論のこと、薬理学関連の研究者との意見交換、情報交換を十分果たされ、皆様にとって有意義な大会となりましたならば幸いです。皆様の益々のご活躍とご研究の発展を祈念致します。

最後に、大会運営を完遂され、機器展示公告幹旋の労をもとって頂いた株式会社コングレに、また協賛頂きました（社）東京医薬品工業協会、（社）大阪医薬品協会、（財）臨床研究奨励基金、機器展示出展企業、ご援助頂きました企業、個人の皆様に深甚なる感謝の意を表します。さらに人的援助を頂きました産業医科大学、九州大学、福岡歯科大学、久留米大学の教室の皆様にも厚くお礼申し上げます。

（今永一成記）

平成15年10月吉日



# 第80回 日本生理学会大会 第76回 日本薬理学会年会

2003年  
3月24日(月)~26日(水)  
福岡サンパレス



第80回日本生理学会大会 平成15年(2003年)3月24日 於 福岡サンパレス